

D. 生徒指導に関する研究

中野 満男 米山 誠 米田 潤一
丸山 豊 齊藤 真子 高橋 守

学級集団づくりの問題点

丸山 豊

1 はじめに

最近、「学級集団づくりが困難になった」という声を聞く。特に中学での教育不在、非行化の波に対処しきれず、教師自身が集団づくりをあきらめている傾向さえみられる。本校も昨年度は、生活指導でも「集団づくり」という観点より個々人の生徒のかかえる問題が多発して、「学級集団づくり」ができにくい状況にあった。また、全体的には「学級集団づくり」を単なる方法論、仲間づくりの手だてとして形式化している傾向も指摘されている。本校では、「集団づくり」のための条件さえ整っておらず、担任が黙々と「学級集団づくり」に励むという状況が数年前までであった。

本論では、まず第一に「集団化の条件づくり」がどう変化したか。今の子どもの変化をどうとらえるか。そのために学校全体で何にとり組むべきかなどにふれ、生徒指導の問題提起にかえたい。

2 条件整備の問題

81年度の本校紀要の中で、私は『学級集団の形成とその組織化』で、次のように問題点を指摘した。

- (1) 本校では集団づくりの視点からの学級経営が十分確立していないし、各学年中学2クラス・高校3クラスという小人数・小規模校に甘えるきらいが、生徒・教師にあるのではないか。
- (2) 各種の学校行事が、クラスの集団づくりを土台とした全校集団づくりに発展せず、「行事は授業をつぶして生徒を遊ばせるのみ」といった論理で、行事があるので仕方なく、最小限の準備で、いかに手際よくやるかに重点がおかれ、全職員・全生徒にやる気がみられなくなっているのではないか。
- (3) 本校は清掃が徹底しない。その理由は全員清掃でないことがあげられる。清掃も学級活動の一環と考えるなら「掃除なしグループ」の存在は問題である。清掃活動の中にも集団づくりの要素が多い故に全校的な問題にはいずれなりそうだ。
- (4) 自習時間の確立も重要な自治活動としてとらえさせたい。「自習がきちんとできるクラスづくり」をめざす立場からは、本校のように、自習時間が生ずると第6限に回し、第6限授業カット・下校させるという慣習?は多くの問題をかかえている。

- (5) 本校は朝の「S・T」(ショートタイム=短学活)がない。S・Tは学級活動であり単なる連絡に終わらせてはならない。プログラ化を考えると同時に、他の公立中のように朝のS・Tの必要性を感じず。

(以上、80年度迄の本校の実態)

(1)に関しては、小規模校を最大限生かす努力がなされてきたかという観点で述べたい。今さら大規模校になる必要もないし、「小さいことはいいことだ」に徹し切った方がよいだろう。その中で集団化を考えるなら各クラスを基盤にした全校の集団化の方向性しかない。ゆとりの時間を生かして、「生徒活動」の時間が設定されているが、その中味も年々充実しつつある。「学活」の時間・道徳等も、たかだか全校六クラスにすぎないのだから(中学)、目標を定めて方向性を示せばかなり前進しよう。各クラスの正担任の会合、「中学担任会」もやっと認知された。以前この「担任会」は、前校長・高桑先生の肝入りで自主的に始まり、各クラスの問題・取り組みなど自由に話し合えた。その後、この「担任会」は、指導部の分掌に位置付けられたため、集団づくりの方法より、統一した生活指導に重点が移っていった。担任会が、学級経営及び学校行事、生徒会活動を含めた生活指導の話し合いの場になっていくことが、今後の大きな課題といえる。

(2)の学校行事をどう集団づくりに生かすかについては、その大前提として一般的には常識となっている「行事は授業そのものである」という認識の共通基盤にたつことである。これがないと行事は邪魔者扱いされ、形骸化され、最終的には廃止の方向に向かう。諸行事が多いとされる本校も、学級を基盤とした行事化の方向より、むしろ分掌主導型で、担任も生徒も「やらされる」という悲しむべき状況となってきている。

中学の場合「学校祭」が唯一の集団化の場であり、その内容も担任と学級生徒の共通目標・一体化がみられ、学活・ゆとりの時間も有効に生かされているといえよう。「演劇コンクール」「合唱コンクール」「作品コンクール」といったコンクール形式を取り入れていることもその一因だろう。年間を通しての学級づくりの観点からいうなら、九月末の「学校祭」に集中化しすぎ、十月以降の取り組みに穴があき、九月を頂点として急激に集団化のエネルギーが減少し、様々な生

活指導上の問題となってあらわれることに注意しなくてはならない。

(3)の清掃についての問題は、昨年度(82年度)から全校一斉清掃に本校もふみきった。確実にしかも早く清掃を実施するために、各クラスでの点検活動のあり方を統一し、また、生活委員を軸とした全校点検など生徒が自ら点検しあい、チェックしていくという集団化の基本が清掃活動にはあると思うが、今後の大きな課題になるだろう。また、生活委員会から美化部門を独立し、美化委員会の必要性も近い将来検討課題になるであろう。

(4)の自習時間の確立の問題は、最終的課題であり、今後とも「自習にすると生徒は騒いで何もしないからできたら帰宅」という解決策でなく、「いかに自習時間を確立できるか」を課題とした積極的な取り組み姿勢を各教科・各学年で示していけるかであろう。しかし、教師がすすめる日常の授業さえ成立しえない中学が多くなっている今は、この問題の解決は夢のまた夢か。

(5)の短学活 = S・Tについては、本年度から朝のS・Tが正式に導入され、生活指導及び学級の集団化への条件整備が一つすすんだ、朝のS・T実施には下からの運動が全校実施へとすすんだ一例である。8時35分予鈴、8時40分授業開始の以前の状況は、40分近くになって生徒が大挙して教室に入りかけ、授業の雰囲気ではないという高校の実態を憂慮した一担任が自主的に朝のS・Tに踏切った。これを契機にして、昨年度は中学担任会で朝のS・T実施を決め、高校もほとんどS・T実施の方向に歩みよった。担任教師たちの生徒・クラスの実態に即した自主S・Tは、ついに教官会議の議案とされ、今年度(83年度)より日課として全校実施になった。しかし、問題は多い。朝も含めてS・T = 短学活とは、なぜ、なんのために、どのように実施したらよいかの視点が欠落している限り、再び廃止の方向に逆もどりする恐れさえある。他校での実

践に学びながらも、本校のS・Tを創り出していけるかどうか大きな課題である。S・Tも含め、L・T、学活をどう学級集団づくりの大きな柱とするかについては、担任と担任以外の教師に大きなズレが生じてきていることは否めない。

3 おわりに

以上、「学級集団づくり」のための条件が数年前とくらべてどのように整備されてきたかについて、問題点にも触れながら述べた。中学の方が、いろいろの面で学級経営・班活動といった具体化がすすんでいる。教師の積極的なクラスづくりの姿勢もここ2~3年顕著に示されてきた。学級新聞・クラス文集づくりといった学級の文化活動も中学のクラスで様々な方法で試みられている。また、教師の手による学級通信が、日刊で年間発行されるなど、生徒の実態に即応した学級づくりがなされてきている。

今後、生活指導の中心というべき「学級集団づくり」に関しての新たな方向性について、中学を中心に触れてみたい。

- 学級活動重視の立場からすると、思い切って部活動を半減させること(特に中学)、学級独自の活動、学年独自の活動を活発化し、全校集団の基礎とする。
- 各教科の活動を学級の集団化に結びつける。たとえば、社会科の中一野外学習とか、国語の読書週間・弁論大会、美術のポスターづくり、体育の諸活動、それへ向けての時間の確保、担任会の役割りをからめて担任も生徒も教科も「やらされる側からやる側へ」の転換をめざす。
- その他にも、親の参加の問題、分掌より各学年間の連絡を密にとる机の配置や体制の問題、朝礼の中高分離等いろいろあるが、詳しくは次の機会にしたい。